



2016年10月2日、早稲田大学小野記念講堂にて開催されたビジネスモデル学会2016年秋季大会において、後掲一覧通りに8名の研究発表が二つの会場にて行われ、多くの参加者を誘った。発表内容は秋季大会のメインテーマである「エコシステムとビジネスモデル」に関連するほか、ブランド価値の形成、産学官連携モデル、OTT(Over-The-Top)がTV放送に与える影響、教育事業における競争的構図など多岐にわたり、コメンテーターを務められる教員からは多様なコメントを述べられた。

以下は、各発表者の問題意識か研究目的などについて記す。

首藤氏の問題意識は次の通り。ブランドは企業にとっての価値ある資産と論じたブランドエクイティ論以降、現在に至るまで、その前提は変わっていない。しかし国内人口が縮小し、デジタルトランスフォーメーションが加速する現在の市場環境の中、従来のブランディングが対応できるのかという疑問がある。従来のブランディングで、盛んに議論されてきた「何を＝価値形成の源泉」「どのように＝価値形成の方法」以上に、その前提となる「誰に＝価値形成の対象」を中心に据えた検討が必要である。

林氏の研究目的は次の通りである。クラウドファンディング(CF)が普及され、市場規模が拡大される中、購入型CFが、単なる商品の購入のみに止まらず、ネットワークの中心的な役割を果たし、ビジネスエコシステムを構築していく、日本のCFであるMakuakeの事例から、CFによるビジネスエコシステムの構築におけるCFの役割とその課題について考察する。

田原氏の発表要旨は次の通りである。住宅内のエネルギーをすべて電気でまかなう、「オール電化」は、2000年頃から震災まで、全国で急速に普及拡大した。シェア1%未満の状態から、わずか10年ほ

どでエリアによってはシェア 70%を占めるまでに拡大した要因には、全国 10 社の電力会社が、プロダクトアウトの発想と視点を変え、ソフトイノベーションとして全社をあげ取り組んだ業務革新と、エコシステム&ビジネスモデル転換への努力がある。当論文では、事例研究として、成功に至るプロセスを検証し分析する。

BMA 2016 年秋季大会研究発表一覧

時間	2016 年 10 月 2 日 午前 11:20~12:20 (15分/1人)			
会場	小野記念講堂		8号館 411号室	
コメンテーター	根来龍之 (早稲田大学大学院教授) 辻本将晴 (東京工業大学大学院准教授)		田辺孝二 (東京工業大学大学院教授) 張 輝 (立教大学大学院客員教授)	
発表者 & 題目	首藤明敏 (明治大学大学院教授)	ブランド価値を形成する顧客生態系に関する試論	白石由人 (元東京工業大学大学院修士課程)	OTT(Over-The-Top) が TV 放送に与える影響に関する考察
	林 永周 (京都情報大学院大学非常勤講師) 江見圭司 (同准教授)	購入型クラウドファンディングによるビジネスエコシステム構築～クラウドファンディングの役割と今後の課題～	南 陽子 (ベネッセコーポレーション)	教育事業における競争的構図の変容に関する一考察～大学受験教育を中心に～
	田原祐子 (株式会社ベリック代表取締役)	All-Denka～ソフトイノベーション～余剰電力の負荷平準化から、発想と視点を変えたエコシステム&ビジネスモデルへの転換～	橋 幸彦 (Bose 株式会社)	自動運転時代へ向けての自動車業界エコシステムの遷移
	佐藤 暢 (高知工科大学研究連携専門監) 松本泰典 (同准教授) 佐藤正一 (代表取締役) 那須清吾 (同教授)	岩手と高知の広域連携事例からみた産学官連携モデル～コーディネータ・ネットワークが生み出す組織間関係～	井上祐樹 (東京工業大学大学院博士課程) 辻本将晴 (同准教授)	プラットフォームエコシステムにおける補完製品のブランドの影響およびそれを考慮したビジネスモデルの検討

佐藤氏の研究目的は次の通りである。科学技術振興機構 (JST) による復興促進事業の中でも、被災地と遠隔地との広域連携による事例として注目される岩手と高知の広域連携事例は、企業側のニーズと

それに応える大学側のシーズがコーディネータ・ネットワークを介して出会い、地域を跨いだプロジェクトの形成に繋がったという点で示唆に富む、と認識し、この産学官連携プロジェクトの形成に至るプロセスを俯瞰し、その構造について、組織間関係論など社会科学的な観点から考察する。

白石氏の研究目的は次の通りである。TV 放送に対して、Over-the-top (OTT) と呼ばれるインターネット動画配信サービスが注目を集めている。日本における TV 放送事業者と OTT 事業者を対象とし、OTT が TV 放送に与える影響を、2つのプラットフォーム上のエコシステム間の関係性の視点から分析し、今後の変遷について考察する。

南氏の研究目的は次の通りである。本研究の目的は、教育事業における競争的構図の変容に関し、校外学習市場における大学受験教育を中心に一考察を行うことである。校外学習市場が IT の発展、社会的環境の変化以前には、どのような構図において成り立っていたのか、その後どのような要因が構図の変化に大きく影響を及ぼしたのかを示すことは、校外学習市場の今後の展開を考えるうえで非常に重要であり、その他の産業や市場においても、容易に考えられる展開と示唆される部分もあろう、と考える。

橘氏の分析方法は次の通りである。自動運転関連技術に関する自動車メーカー、Tier 1 サプライヤー、または自動運転時代に向けて新規に自動車産業に参入してきた新規のプレーヤーの技術開発動向やサービス、ビジネスモデル構築に関する動向を歴史的経過とともに調査・分析する。調査対象の情報源としては企業のプレスリリース、様々なイベントで実施されたデモンストレーション、セミナー・ワークショップ等での発表内容や、関係者へのインタビューであり、それらの事実関係から現時点までの段階で自動運転技術に積極的に投資している企業（完成車メーカーに限らず）の周りにどのようなエコシステムが形成されてきたかをまとめる。

井上氏の研究内容はその後論文として投稿され、論文委員会にての査読を得て、今号のレフリー原著として掲載している（井上・辻本共著）ので、ここでの記述を略す。



真剣に研究発表を聞く第 2 会場のワンシーン